

はじめに

PIERS 研究会がイギリスの栈橋の調査を始めた最初の年から、それを聞いた多くの方々から「栈橋ならアメリカにたくさんある」とか「ドイツにもある」と云う情報が寄せられた。しかし「(不思議な) 栈橋」の発祥地と思われるイギリスの栈橋を極めようと決心し、3年間はイギリスの栈橋の調査に集中した。その結果、現存する栈橋のほとんどを訪れ、一つ一つを体験(体感)することが出来た。その成果は年度ごとに報告書としてまとめられている。イギリスの栈橋について、日本語で書かれた資料でこれらの右に出るものはないと言っても過言ではないだろう。

栈橋の構造は簡単である。海中に杭を打ちその上にデッキを設ければ、もう立派な栈橋である。したがって多くの方から「栈橋なら〇〇にもありますよ」という情報を教えていただく度に、「我々の探求しようとしているのは、その栈橋を利用して海の上を歩き、海風に触れ、さえずるもののない海の眺めを楽しみ、振り返って我が街の景観を確認するもの〈Promenade Pier〉なのだが」という、不安が常に付きまとっていた。この2年間に筆者が国際シンポジウムや別の調査のために訪れたフィジーやスウェーデンでも「栈橋」に遭遇した。フィジーでは先端にやしの葉で屋根を葺いた東屋を持つ栈橋、スウェーデンではマルメ市の郊外に10基の栈橋が建設されていた。前者の目的は宗主国イギリスの栈橋に近いのではと感じたが、後者は海に下りる階段がついており栈橋上あるいは陸地部にサウナ小屋があることから明らかに冷水浴のための栈橋である。

中世のヨーロッパの上流家庭に子弟を育てるための「大旅行 The Grand Tour」と言う習慣があった。将来立派な貴族となるために身につけておかなければならない歴史、文化を学ぶために、教師あるいは従者を連れて馬車で長期間の国外旅行をする。「大旅行」だけでなく、外国の王族との通婚も珍しいことではなかった。この「大旅行」の風習や王族間の通婚のおかげで、指導者(王族、貴族)は広く外国の知識に通じていたから、ヨーロッパの各国では異国(異民族)であるにもかかわらず、類似の建物、街づくり、風習等が生ずることになったのではないかと思う。しかし形は伝わってもその精神まで伝わるのは難しいのではないか。

テムズ川河口部のマーゲートにイギリスで最初の栈橋が建設されたのは1810年であり、第1次の栈橋建設ブームが始まるのが1860-70年代であるが(2013年報告書 p.13)、今回訪れたブランケンベルへの栈橋はそれから間もない1894年に建設されている。今回三カ国の栈橋を訪れてひとつひとつを体験しながら、栈橋の形は同じであるがイギリスの栈橋とは異なるものがあ

るように感じた。

イギリスの栈橋は規模の大小、構造の立派さなどはそれぞれ異なるものの、一部を除けば「海の上を歩き、海風に触れ、遮るもののない海の眺めを楽しみ、振り返って我が町を見る」という基本的な目的が貫かれていたように思うが、欧州に渡った栈橋にはその精神が徹底されているとは感じられなかったことだ。それは、栈橋の目的に対する「これで良いのだ」という自信が希薄なためではないか。ブランケンバルへの栈橋に海岸リゾートの魅力を高めることを期待しているとは思えない。スヘフェニンゲンの栈橋は経営に不安があったのか、これでもかというほどリゾート施設が付加され、収益をあげられるようになっている。ドイツの栈橋は、明らかに海からのアプローチ機能に存在の根拠を置いている。いずれも、都会生活をする上流階級の人々が散策の場として公園 (Pleasure Garden) が作られ、それが海の上に展開されたというイギリスの栈橋の原点のようなもの (2013 年度報告書 p. 11) が希薄である。

これらの差がどこから来ているのか。『元祖』とあるのが本物。『本家』は偽者」と訳知り顔をする者をネタにする落語があったように記憶しているが、我が国の港湾や海岸空間の魅力を高めていくためにいずれを栈橋の存在意義の「元祖」とし、いずれを「本家」とするのか、栈橋の調査を広げれば広げるほど、様々なバリエーションが出てくると思われる。さらに、栈橋が前面あるいは近傍にあると無かろうと海浜の背後には海を眺めながら散策する路 (エスプラナード) が整備されていたことを思うと、栈橋に付随してエスプラナードが整備されたのではなく、エスプラナードから「海を眺め、海風にあたる」という栈橋 (Promenade Pier) が生まれたのではないかとも思えてくる。これらをどう整理して我が国の海岸リゾートや港湾空間の魅力の向上に役立てるか、今回の調査は整理すべき課題を浮かび上がらせてくれたのではないかと感じている。

(執筆者；栢原 英郎)



フィージーの栈橋



マルメ (スウェーデン) の栈橋